



## 洪水の遺産から地域の災害特性を学ぶこと

江戸

## 吉野川下流域の高地蔵たか(徳島県吉野川下流域)



▲高地蔵探訪ガイドブック  
([http://www.toku-milt.go.jp/river/river\\_index.html](http://www.toku-milt.go.jp/river/river_index.html))



◀東高原の南の地蔵



▲東中富の龍池の地蔵



▲国府日開の法光寺前の地蔵

吉野川下流域のかつての氾濫原では、俗に「高地蔵」さんと呼ばれている台座の高いお地蔵さんが堤防の近くや川岸のあちこちに多く見られます。この高地蔵は、先人たちの「洪水でお地蔵さんが水に浸かつたり流されたりしては申し訳ない」という信仰心から、つくられたものと言われています。そのため記録的大洪水に見舞われた江戸後期から明治にかけて建立されたものが多くあります。

高地蔵の台座は、土地が低く、浸水が大きかつたと考えられる場所では高くなっています。言い換えると、高地蔵が高ければ高いほど、その地区の水害は大きかつたことになります。台座高が一メートル以上の高地蔵が約一九〇ヶ所確認されています。このうち、最も高いものは徳島市国府町東黒田の「うつむき地蔵」で、全高四・一九メートル、台座高約三メートルもあります。このお地蔵さんが見おろしている辺りは、吉野川と飯尾川にはさまれたかつての洪水常襲地帯であり、その高さから当時の氾濫水位がいかに高かつたかがわかります。

お地蔵さんがある場所を地図上に記入してみると、吉野川下流域、しかも右岸(南岸)に多いことがわかります。これは下流域ほど洪水時の水位が高く、右岸(南岸)のほうが左岸(北岸)よりも地形的に低いため洪水常襲地帯になっていたことを反映したものと考えられます。

しかし、高地蔵が伝えているのは、それだけではありません。身近な高地蔵に供花や供物を捧げ、祀ることによって、毎日の暮らしの中で、いつも洪水の恐ろしさを忘れることなく、水防への心構えをしていたのです。高地蔵は、四国三郎・吉野川と闘い、共に生きた先人たちが水の危険性を伝承してきた文化財なのです。

## 背景

吉野川の下流域では、堤防の近くや道の四つ辻などに、台座の高いお地蔵さんが数多くあります。吉野川下流域は、土地が低く、たびたび洪水に見舞われていたため、人々は、お地蔵さんが水に浸かつたり流されたりしては申し訳ないと思い台座を高くしたのです。このため、高地蔵の台座の高さは、その地区的洪水の大きさを示しています。また、これは洪水の恐ろしさを後世に伝えようとする先人からのメッセージでもあります。

## アクセス うつむき地蔵

- 名田橋南詰より西南西に直線距離約1.5km
- 徳島市国府町東黒田
- 緯度経度 北緯34度06分01秒、東経134度28分58秒



# 洪水の危険性の高い地域であることを学ぶこと

そうしゅいん こんせき  
蔵珠院の洪水痕跡 (徳島県徳島市)

慶応二年（一八六六）に吉野川が起こした洪水は歴史上最大の洪水で、幕末の動乱期に起きた前代未聞の大水害でした。

七月末から降り始めた雨は、次第に大雨となつて、八月六日の夜まで降りしきり、つづく七日の夕方には古来まれた大水となりました。連日連夜の豪雨により吉野川の水量は膨れ上がり、第十の土手などが切れ、土地の高いところでも床上二、三尺（約六〇～九〇センチメートル）、低いところでは天井に達するほどの浸水となりました。田畑は荒らされ、家や牛馬が多数流され、避難民は舟に乗り移りましたが、四方まるで海のようになり生死のほども知れず、ところどころに救助を求める声があわあわと記録されています。この時の洪水の痕跡が、今でも蔵珠院に残されています。それは茶室と板戸に残されたシミで、それを見ると床上二尺（約六〇センチメートル）まで浸水していたことがわかります。蔵珠院が建つ土地は周囲の畠よりも高く、その分を計算すると浸水深は三メートルにもなります。

蔵珠院の過去帳には、この洪水により阿波の国中で三万七、〇二〇人の男女や牛馬などが溺死しました。三人が溺死したことが記録されています。



▲蔵珠院の茶室に残された洪水痕跡  
(四国三郎物語より引用)



▲「寅の水」を記録した過去帳 蔵珠院所蔵  
(四国三郎物語より引用)

## 背景

幕末の慶応二年（1866）に、阿波は天正13年（1586）の蜂須賀氏入国以来の大水と言われるほどの記録的な大雨に見舞われました。吉野川にほど近い徳島市国府町芝原の蔵珠院には、慶応二年の寅年の水の洪水痕跡とその凄まじさを伝えた過去帳が残されています。また、この洪水の恐ろしさを後世に伝えるため、平成7年（1995）には山門前に当時の水位を示す標柱が建てられました。

## アクセス 蔵珠院

- 第十堰南岸より南へ直線距離約1.5km
- 徳島市国府町芝原字宮ノ本3
- 緯度経度 北緯34度05分33秒、東経134度27分47秒

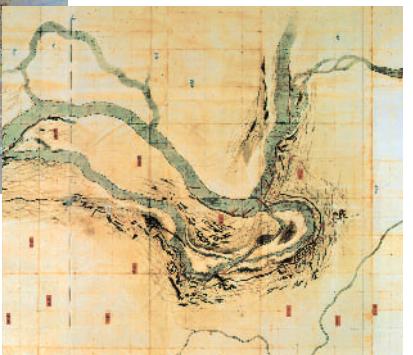




## 歴史的な施設の由来に学ぶこと



▲龍藏堤



▲「村々沼川堰留之図」の一部  
(国立国文学研究資料館所蔵)

### 背景

吉野川の第十堰の南側、徳島市国府町に芝原というところがあります。第十堰が造られる少し前、この辺りには一面に藍畑があり、そこに住む人々は、丹精込めて藍を作っていました。しかし、毎年のように吉野川が氾濫するので、家や牛馬は流れ、せっかく耕した田畠も台なしになりました。そこで村の人々は人柱を立てて、堤を守ることを考えました。昔から人柱を立てると、川の怒りを鎮めることができると考えられていたのです。これは、庄屋さんへの恩返しのために、人柱になった龍藏さんの話です。

### アクセス

#### 祠と龍藏堤

- 第十堰南岸より南へ直線距離約 1km
- 徳島市国府町芝原 竜王団地北東端
- 緯度経度 北緯34度05分52秒、東経134度27分29秒



第十堰が造られる少し前の話です。村の世話役たちが、庄屋さんを囲んで、どうしたら頑丈な堤がつくれるかを相談していました。それまで輪の中で、腕組みをしたまま考え込んでいた庄屋さんが、こういいました。「もう、こうなつたら、人柱を川に入れるよりしようがない」「誰を人柱にするんな?」「明日の朝、いちばんに通つた者を、人柱にしよう」庄屋さんはきっぱりいいました。こうして、川に人柱を入れて、堤を作りなおすことが決りました。

その夜、庄屋さんの妻は、庄屋さんから次のようにうちあけられました。

「人柱には、私がなる。私がなれば、みんなのためになると思うとつたんじや。明日の朝いちばんに出かけるけん、白装束を用意してくれ。どうぞ、あとのことはくれぐれもよろしく頼む」

ところが、この二人の話を聞くとはなしに聞いていた人がいました。龍藏です。龍藏は、日頃から職も持たず、庄屋さんの家から食べ物を分けてもらつて暮らしていました。「えらいことになつたもんじや。庄屋はんが人柱になるんやつて。あない偉い人を死なせたらあかん。わしが身代わりになる」

翌朝、村人たちが息をひそめて待つていると、白装束の遍路姿の男がやつてきました。村人は近くに石の祠を建てて龍藏をまつりました。この祠を「川贊さん」と呼んでいます。

すると、水音に混じって、男の声が聞こえてきました。

「庄屋はんによろしゅういうといて。龍藏は喜んで身代わりになつたちゅうて」

ほどなくして、白装束に身を包んだ庄屋さんがやつてきました。「龍藏、礼を申すぞ。おまえの命はけつして無駄にはせん」こうしてできた堤防が「龍藏堤」です。村人は近くに石の祠を建てて龍藏をまつりました。この祠を「川贊さん」と呼んでいます。

# 公平な治水をめざした先人の知恵に学ぶこと

しるし  
印石 (徳島県石井町)



印石とは、堤防の高さを記した石のことです。堤防の高さをめぐる川の両岸の対立を静めるために設置されたもので、高さ一メートル程の所に線が一本刻まれています。

文化年間（一八〇四～一八一八）に高畠村（現石井町藍畠付近）本村地区の人々は、吉野川とその支流である新宮川（現神宮入江川）の洪水による田畠の冠水を免れるため新しく堤防を築きたいと藩に願い出ました。しかし、隣の中州地区の人々から異議を申し立てられ、およそ四〇年間も堤防の築造とその高さをめぐつて紛糾が続きました。

嘉永四年（一八五二）に郡代は本村・中州両地区の人々の言い分を聞き、双方納得の上で中州地区の土地の高さと同じ高さ約三尺余（約一メートル）の堤防を築くことで決着し、新しい堤防が完成しました。ところが、嘉永六年（一八五三）、本村地区の人々が中州地区に断りもなく、完成した堤防にさらに土を盛つたため、争いが発生しました。郡代は両者の話を聞いた上で、本村の人々に土を除去するように命じました。その上で、今後争いが起らぬようとに、石柱の上部に堤防の高さを示す線と「印石」という文字を刻み、その石柱を堤防の各所に埋めこみました。

このときの経緯を記した石碑が皇太神宮こうたいじんぐうという小さな社の横にありますが、それには二一個の印石を堤防の各所に埋設したと書かれています。そのうちの一つが平成八年（一九九六）に完全な形で発見され、現在石井町藍畠の産神社境内に設置されています。



▲産神社の印石

## 背景

藩政期には、堤を築く際には、まず藩に願いを出して、村同士で話し合いをしなければなりませんでした。しかし、村同士の話し合いは、利害が対立したまままとまらない場合が多くありました。このため、無断で堤を築いたり、誰も見ていない隙を見て堤に土を盛ったり、反対にそれを削ったりという手段に訴えた結果、村ぐるみの紛争に発展することもありました。この争いが長引くと藩が調停に乗り出し、対立する村々の間で一定の取り決めをして決着をはかることもありました。

## アクセス 産神社

- 六条大橋南詰より南へ約700m
- 石井町藍畠
- 緯度経度 北緯34度05分47秒、東経134度26分15秒





## 洪水の遺産に込められた歴史を学ぶこと



▲モチの木  
(徳島市国府の秋田邸)



▲愛宕地蔵

### 背景

石井町西覚円の愛宕地蔵は、覚円騒動の証人です。明治時代の吉野川改修工事は、明治18年（1885）に西覚円から着手されました。西覚円の堤防が9割方完成していた明治21年（1888）7月31日に洪水が発生しました。この結果、堤防が369間（約664m）にわたり決壊し、人家78戸が押し流され、26名が亡くなりました。この水害を契機に覚円騒動と呼ばれる出来事が起こりました。亡くなった方を供養するために建立されたのが愛宕地蔵です。

### アクセス 愛宕地蔵

- 高瀬橋南詰より南西へ直線距離約200m
- 石井町藍畑字西覚円
- 緯度経度 北緯34度05分49秒、東経134度25分25秒



吉野川の近代の改修工事が始まつた明治一八年（一八八五）から三年後にある出来事が起こりました。明治二一年七月三一日、それまでの長雨の影響で吉野川は大洪水となり、石井町西覚円の堤防が決壊し、濁流が多くの民家を押し流しました。徳島県が吉野川の堤防工事のために事務所として使っていた家には、大きなモチの木が植えられていました。人々は濁流に流れまいとそのモチの木によじ登り、助けを求めるました。その様子はまるでモチの木に人々が「鈴なり」になつてゐるかのようであつたと伝えられています。しかし、水の勢いはますます激しくなり、さらにモチの木に上流から流れてきた民家が引っ掛けかかり、モチの木は根元から倒れてしまいました。一瞬にして、木も人も濁流に押し流されました。

洪水の後、地元の住民は、この大惨害は県による堤防工事が遅れたことと、内務省の低水工事（沈床工）が原因であるとして、内務省の改修工事の廃止を県に働きかけました。（注：航行する舟や筏が沈床工に接触して、起ころうになつたため、沈床工は舟筏を沈める恐ろしいものと。）その結果、低水工事はわずか四年で中止されました。この出来事は、今でも「覚円騒動」として話が伝えられています。

現在、かつての破堤の場所には、大きく丈夫な堤防が築かれていて、かつての惨事を思い起こさせる痕跡（こんせき）は見あたりません。ただ、水害にあわないようにとの思いから建てられた愛宕地蔵だけが、かつてモチの木のあつたあたりを見守っています。



## 堤防名に残された由来を学ぶこと

## いながきけんもつ けんもつつい 割腹した稻垣監物と監物堤 (徳島県吉野川市)

江戸



◀監物堤があった牛島地区  
(○印は稻垣神社)



▲吉野川絵図の一部  
(徳島県立図書館所蔵 四国三郎物語より引用)

### 背景

徳島ではよく知られる吉野川遊園地のある鴨島かもじまのまちには、吉野川、江川、飯尾川という三つの川が西から東に流れています。江戸時代には、吉野川がひとつたび氾濫すると、この三つの川が一つの川のように流れています。牛島村（現在の吉野川市鴨島町牛島付近）は洪水の時にはたびたび被害にあっていました。そこで村人たちは、岸之上というところに堤を築いて、吉野川の氾濫水の一部を飯尾川に放流し、被害を最小限にとどめました。この話は、洪水から住民を守るために築堤に命を賭けた「稻垣監物」の行動を描いたものです。

### アクセス 稲垣神社

- JR牛島駅より西南西へ直線距離約500m
- 吉野川市鴨島町牛島字中桑上473
- 緯度経度 北緯34度04分28秒、東経134度23分33秒



宝暦年間（一七五一～一七六三）に吉野川が氾濫し、大洪水により岸之上の堤防が崩れてしまいました。少しでも早く堤防を直さないと、またいつ吉野川が氾濫するかわかりません。しかし、その頃は農民たちが勝手に堤防を築いたり直したりはできませんでした。どんなに小さい堤防でも藩の許可が必要だったからです。牛島村（現在の吉野川市鴨島町牛島付近）の農民たちが困っているのを見て、藩に、堤防を補強したいと願い出た人がいました。稻垣監物という人です。監物は、堤防を直して、水を南の向麻山の麓の方へ放流すれば、牛島村へ水が侵入するのを防げると考えたのです。しかし、藩からの許可はなかなか出ませんでした。その上困ったことに、この監物の計画に対しても、向麻山の麓の上浦地区の村人が反対したのです。たしかに、よその村にできた堤防のせいで、自分たちの村に水が押し寄せてきてはたまつたものではありません。藩からは許しが出ず、よその村からは反対される。それでも、牛島村は守らなければならぬ。監物はどんなに悩んだことでしょう。

ある夜ひそかに、村の農民をすべて呼び出すると、一夜のうちに堤防を築いてしまいました。村人たちの喜ぶ姿を見て、監物はほつとしましたが、一緒に喜べませんでした。堤防が完成した朝早く、監物は堤の上にのぼると、そこで切腹しました。「村人たちに罪はない。私の一存でやつたこと」という思いから、責任を一身に背負つて死んだのでした。

完成した堤防は、土を搔き寄せたもので、高さ一・三メートル、延長九〇メートルほどでした。この堤防は、稻垣監物の名をとつて、監物堤と言われるようになりました。



## 私財と命を投げ出した先人の苦労を忘れぬこと



▲三王の碑



三王堤防の標識▶

### 背景

昔、吉野川上流の貞光付近の吉野川の流れは、今とはかなり違っていました。貞光辺りでは、吉野川は西崎から二手に分かれ、一方は南を流れ、もう一方は北を流れ、江の脇で合流していましたので、今の貞光のまちの北半分は水の底にありました。このため、雨が降り洪水が発生すると、潮流が沿岸を洗い、住民の被害は甚大だったと言われています。この話は、住民のために築堤を始めたものの、工事に関して住民に過重な労役を課したために訴えられて自害した代官の話です。

### アクセス 三王神社

- 美馬橋の南詰からJR貞光駅方向に100m程行き、右手の山への小道を100m程登る
- つるぎ町貞光字西山
- 緯度経度 北緯34度02分28秒、東経134度03分14秒



しかし、着手してみると予期せぬ困難が続出しました。難工事のため仕事を捨てて逃げる人夫が多くなりました。また、予定以上に工費がかさみ、その金策もつかなくなりました。このため、代官は私財のすべてを投げ出し、しばらく工事は順調に進みました。ついには工事の完成をあせって近辺の村々にお触れを出し、連日農民を無償で工事にあたらせました。苦しさに耐えかねた農民はその困苦を藩主に訴え、結局、代官は役所を追われる身となりました。

役所を追われた原喜右衛門は、西崎山の平らな石の上に座して眼下に流れる吉野川に目をやりました。すみきつた水、まさに完成に近づいている工事現場も一望の下にあります。無量の感慨をこめて静かに用意した九寸五分（三〇センチメートル弱）の短刀を右手に左の脇腹につき立て一文字に引きました。供をしてきた二人の家来も追腹（家臣が主君の死のあとを追つて切腹すること）を切りました。

今日では、三人は堤防建設により貞光の発展を築いた三人の義人として、吉野川を見下ろす三王神社に祀られています。



水防竹林は、三好市池田町付近から下流吉野川市川島町にかけての吉野川中流域に多く残っています。その規模は日本一であると言われています。かつて吉野川の両岸には、幅広く大規模な竹林が万里の長城のように連なっており、戦前、徳島本線は竹の美林に沿って走る鉄道として有名で、その美しさは日本一と称されていました。

藩政時代には、財政的な理由などから吉野川の洪水を制御できる規模の堤防を築くことができませんでした。このため、徳島藩は沿川部や堤防に竹藪の植え付けを奨励しました。明治三年（一八七〇）の徳島藩「郡中制法」にも、「堤防川岸などへは柳・吳竹などを植え、出水の節は圃に相なるべく常々心配りを遂ぐべきこと」と定め、竹林等の造成、保護につとめていました。現在の見事な美林の三加茂（現在は東みよし町三加茂）の村長が村の有志から寄付金をつのつて、延長八二〇メートル、幅一八メートルにわたつて植林したのが始まりです。成長し地下茎のからんだ竹林は水害防備林と呼ばれ、洪水による浸食から川岸や堤防を守りました。また、洪水の水勢を弱め、岩や小石が耕作地に流入したり、家屋が流失したりすることを防ぐ役割を果たしました。

かつて水防竹林の竹材は物干し竿、釣り竿などにも利用されました。また、竹尺や和傘の原料となり、明治から昭和にかけて竹林を利用した地場産業の発達をもたらしました。今日では竹の需要が少くなり放置された竹林が多くなっていますが、かつて川沿いの人々は、洪水被害を緩和するとともに、その利用により収益をあげができる水防竹林を大切に育み、守ってきました。

水防竹林は吉野川を彩る風物詩であり、洪水と闘う流域住民の知恵でもあります。



▲現在の吉野川の水防竹林（東みよし町三加茂）

## 背景

暴れ川四国三郎の異名をもつ吉野川は、藩政時代には財政的な理由などから堤防で守ることが困難であったため、吉野川沿いに竹林の植え付けが奨励されました。吉野川の堤防が整備されるにつれて、かつて緑の堤防のように連なっていた水防竹林は下流部ではその役割を終え、少なくなっています。しかし、今日でも中流部では竹林が連なり、吉野川の洪水から地域を守るために役立っています。この話は、築堤が許可してもらえたかった時代に、次善の策として緑の堤防と言われる竹林の植付けを行った先人の知恵を描いたものです。

## アクセス 西庄地区水防竹林記念碑

- JR三加茂駅より南西へ直線距離約1km
- 東みよし町西庄山田69 八柱神社境内
- 緯度経度 北緯34度02分09秒、東経133度56分23秒



## 洪水から我が家を守る知恵を継承すること

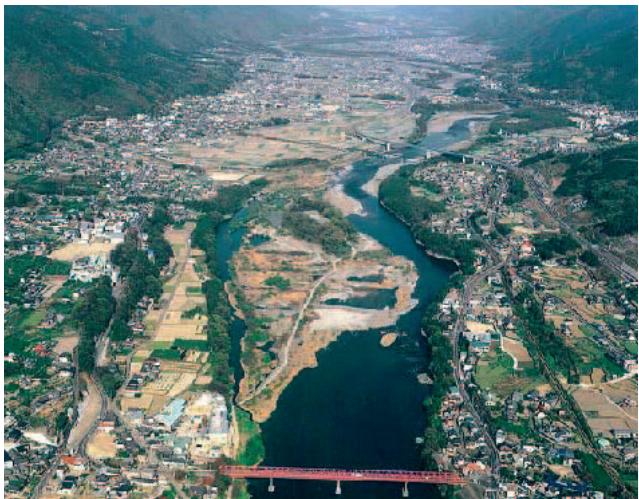
## 浸水時の知恵（徳島県三好市）



三好市池田町シマ地区は、昭和五〇年（一九七五）に池田ダムが完成するまでは、洪水のたびごとに頻繁に浸水していました。川の水が急に増して来て、半鐘<sup>はんじょう</sup>が打ち鳴らされると、各家ごとに荷役を始めました。まず下の物から取りかかれと、石炭箱などを並べ、畳を上に積み重ね、履物など下の物全部その上へ上げます。そして、雨戸を締め「ツツカイ」をします。家に押し寄せてきた水の水圧で雨戸が弓のようになり、はざれるのを防ぐためです。雨戸がはずれると、家財道具が一瞬にして押し流されます。半鐘は夏には四、五回耳にしました。

昭和二九年（一九五四）九月の大水の時は、水位が床上一メートル以上もあつたように記憶しています。階段三段目から小便をたれ流したことを思い出します。このような大水は、出水も早いが、引くのも早いのです。引きかけたら家の中に水がある内に、流れてきた泥・雑草などを押し流し、洗い流します。これを忘れると、後で大変面倒になり、手間がかかるのです。出水時には、親戚や知人が馳せ参じ一生懸命手伝ってくれますが、いつたん家の中の水が引くと、家族だけで後始末をせねばならず、とても重労働でした。

壁は流され、竹で組んだ骨組みばかりで、夜ともなれば隣から隣へと見透して、提灯<sup>ちょうちん</sup>やローソクの光で後かたづけするのは淋しく、哀れでした。子供心にも天気が統ければと、そればかり祈っていました。不潔な泥水にびしょ濡れになつた物ばかりで、不衛生この上ありません。町役場の配慮で消毒が行われ、平常どおりになるのに一ヶ月ぐらいはかかつたと思います。



▲島づくり（無堤の吉野川上流域）



▲昭和29年洪水

### 背景

最近まで洪水のたびごとに水に浸かっていた吉野川上流地域では、浸水時の知恵が伝えられています。例えば、三好市池田町シマ地区も地盤が低い地域であり、昭和50年（1975）に池田ダムが完成するまでは頻繁に浸水していました。このため、地域の人々は、浸水した時に被害を軽減するよう対応する術を身につけていました。今日では浸水時の知恵が忘れられがちですが、シマ地区の古老の話は、浸水への備えや心構えを教えています。

### アクセス シマ地区（県立三好病院周辺）

- JR池田駅より東へ約1.5km
- 三好市池田町シマ815
- 緯度経度 北緯34度01分42秒、東経133度49分04秒



## 背景

那賀川は「阿波の八郎」と言われるほどの暴れ川で、かつて沿川では頻繁に洪水に見舞われました。阿南市羽ノ浦町には大きな広間を持つお寺があり、この広間の畳は洪水の氾濫を防止する道具として使られてきました。那賀川の水位が上昇すると、地域の人々が畳を持ち出し、堤防の上に畳を横に立て並べて、裏に土俵を積むなどして畳の堤防を築きました。

畳が庶民に普及し始めたのは江戸中期以降と言われていますが、一般の農民の手の届くものではなかったようです。このため、地域の人が共同で負担してお寺の広間に畳を敷いたり、庄屋などが地域のために提供していました。

## アクセス　観音寺

- 那賀川橋北詰より北東へ直線距離約1km
- 阿南市羽ノ浦町古庄宮ノ後78
- 緯度経度 北緯33度56分45秒、東経134度37分48秒



じつは、この大広間の畳は、かつては水防のためにも重要な役割を果たしていました。大雨が降り、那賀川の水位が七分水（堤防高の七分目ぐらいの水位）になると、地域の人々がお寺の畳を堤防に運んで、洪水に備えたそうです。この地域には水防活動の用語として「百畳敷」の言葉があつたと言られています。また、付近の旧庄屋敷でも普段、集会所として使用できる広間の畳を、水防用に確保していたと伝えられています。

畳は日常生活にとって大事なもので、水害時には濡らさないように二階や高いところに上げられます。それにもかかわらず、お寺や庄屋さんの大切な畳が水害時に洪水から堤防を守るために使われていたのです。地域の水防活動の拠点としてお寺が活用されていたことや、村人のために庄屋さんが果たしていた献身的な役割をることができます。



## 堤防の建設と維持に費やされた先人の苦労を知ること

万代まで続け、「万代 堤」(徳島県阿南市)



古毛の大岩の標識▶

### 背景

天明7年（1787）、那賀川の氾濫により、古毛村など那賀川下流の村々では田畠が流されるなど、大きな水害に見舞われました。古毛村の庄屋・吉田宅兵衛は洪水から人や田畠を守るため、堤防をつくろうと考えました。下流の村々とも話し合い、藩に堤防工事の許しをもらい、工事を完成させました。しかし、その後も堤防が壊れることが度々で、人々は堤防を万代まで末永く守るために工夫、努力をしてきました。

### アクセス 万代堤の碑

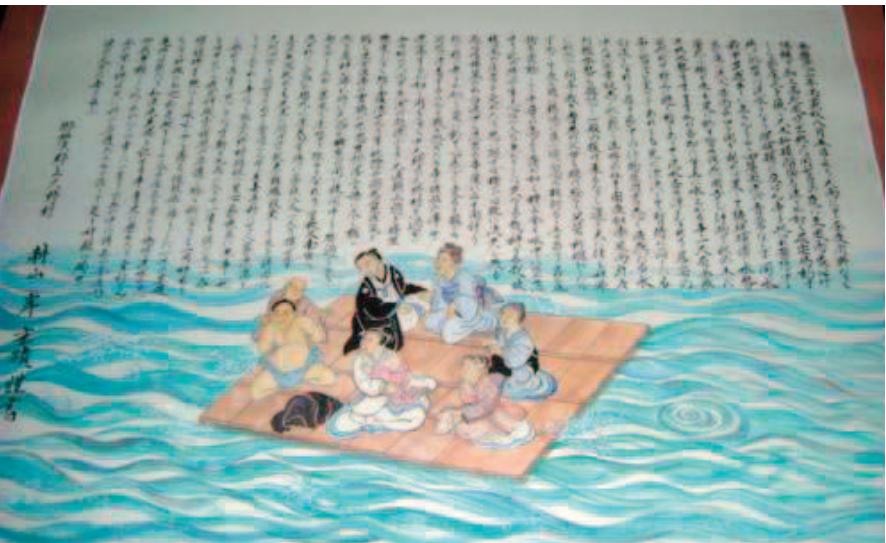
- ・持井橋より東に約1kmの北岸堰北詰
- ・阿南市羽ノ浦町古毛
- ・緯度経度 北緯33度56分38秒、東経134度35分11秒



万代堤は、山間部から平野に出て右に曲がる那賀川が正面にぶち当たる位置にあります。万代まで續けという思いで造られた万代堤ですが、その歴史には紆余曲折がありました。  
天明七年（一七八七）の大きな水害の後、古毛村（現在の阿南市羽ノ浦町古毛付近）の庄屋・吉田宅兵衛は、洪水から人や田畠を守るため、那賀川に堤防をつくろうと考えました。下流の一四の村を回つて計画を話すと、どの村の庄屋も賛成してくれました。このため、宅兵衛は藩に堤防工事の許しを願い、藩から許可を得ることができました。  
工事中には大水が出て、築堤中の堤防が流されたこともありましたが、下流の村々の人々はそれぞれが受け持った場所で一生懸命工事を進め、ついに堤を完成することができました。長さ五九四間（約一、〇七〇メートル）、底幅一四・五間（約四四メートル）、高さ三間二尺五寸（約六メートル）、天端幅四間（約七・二メートル）の堤でした。  
この堤は当時の阿波の国では一番大きな堤防でしたが、文化元年（一八〇四）の大洪水により崩れてしましました。このため、人々は堤防修理を始めました。この堤防は藩の命令で「万代堤」と名付けられ、人々は今度こそ洪水に負けない頑丈な堤をつくろうと努力し、万代堤を完成させました。  
万代堤の完成後も洪水により堤が壊れることは度々でした。このため、庄屋の吉田家の人々が中心になり、村人が力を合わせて、水勢を弱めるために牛枠（うしわく）（水の流れの向きを変えたり、堤防への水当たりを弱めるためには堤防から川の中心に向かって出した構造物（水制）の一種。丸太で組んで作った枠を石を入れた籠で押さえられた構造物）をつくつたり、大岩による水剣（みずはね）（水制）を設けるなど、堤を守るために工夫、努力を重ねてきました。



## 家が壊れても、最後まで生きることを諦めぬこと



▲城山神社に奉納されている絵馬

### 背景

昔から「寅年は荒れる」と言られてきましたが、慶応2年（1866）も寅年でした。8月5日から降り続いた雨は、約80年前の天明以来、最大の洪水を引き起こしました。那賀川の南岸では、阿南市上大野から富岡に至るまで各所で堤防決壊や家屋流失などの大被害が生じ、阿南市富岡では30名以上の生命が失われたと記録されています。また、那賀川の北岸では、羽ノ浦町古毛の万代堤が200間（約360m）以上にわたって決壊し、古毛の家々が流失したと言われています。

### アクセス 城山神社

- ・持井橋より南へ直線距離1.5km
- ・阿南市上大野町
- ・緯度経度 北緯33度55分33秒、東経134度34分43秒



那賀川の奥に降った雨が一気に下流を襲ってきました。土手も藪も流して行きました。代々お医者様の岸玄硯先生の家は大野城のふものありました。那賀川の水位が上がり、さすがの大きな家も浮いてしまいました。大量の雨水を含んだ大きな葦葺きの屋根の重さのために、家はひっくり返り、バリバリと音を立てて壊れていきました。この時、天の助けか、八畳の天井板がポツカリと目の前に浮かびました。

玄硯先生夫婦、幼い二人の子、年老いた両親、親戚の娘さん、そして婆やさんの八人は天井板に乗り、洪水中を流れに身を任せて流れで行きました。那賀川の本流は逆巻く流れでしたが、大野辺りになつてくるとゆつくりと流れ、下大野にくると八貫から岡川へと流れが変わり、西方の八幡様の馬場の松の枝にも手が届くかとも思われるようになつて行きました。

八人は手を合わせ、普段信仰している城山神社を伏し拝みました。すると、流れること一里（四キロメートル）ようやくにして助かりました。

流れ着いた所は立善寺村（現在の阿南市宝田町）でした。九死に一生を得た家族の歎びは何物にも代えることはできなかつたと思います。家族の歎び、神仏の加護のありがたさを表すために、玄硯先生は漂流の姿を大きな絵馬に仕上げて城山神社に掲げました。



## 堰をめぐる上下流の争い (徳島県阿南市)

かつては堰をめぐって深刻な上下流の対立が生まれるほどの渇水があったことを知ること

桑野川に一の堰が造られたのは、寛永一五年（一六三八）のことです。この堰のおかげで、下流の水田に水を引き入れができるようになりました。その反面、堰上流の地域では、大雨の度ごとに浸水被害が頻発しました。このため、堰上流の人々は一の堰の改修について大正の中頃から政府に陳情を重ねてきましたが、改修は実現しませんでした。事件が起こったのは、室戸台風で大被害が起こった昭和九年（一九三四）から二年後の昭和一年でした。

この年の夏は、八月一〇日頃から連日雨が続いたため、低地部では浸水が続き、その上台風が接近していました。八月二六日、降りしきる豪雨の中、半鐘が乱打されます。蓑笠の人々が、決死の気持ちで一の堰に集まっています。浸水被害に遭っている上流の農民たちが一の堰を壊したのです。皆無言です。見守る下流の見能林の農民たちも無言です。警察官もただ見ているだけです。

一時間たち、二時間たつて、やがて上流の水が下がりかけました。上流の農民の目的は達したのです。意き揚々と郡八幡神社に引き上げていきました。樽酒があけられ、冷や酒で祝杯があげられました。代表者二、三人が一晩警察に留置されましたが、皆無事に帰宅しました。

川にはそれまで堤防がありませんでしたが、この事件を境に、堤防がつくられ、昭和三五年（一九六〇）に完成しました。また、新たな一の堰は昭和一八年に下流に造られましたが完全ではなく、三代目の立派な一の堰ができたのが昭和四三年でした。事件以来三二年たっていました。



### 背景

桑野川の一の堰は、牛岐城主の賀島政重が寛永十五年（1638）幕府の許可によって造ったと言われています。長さ20間（約36m）、堤底10間（約18m）の一の堰が完成し、富岡東部、見能林、津ノ峰の七百余町歩（約7km<sup>2</sup>）の水田に水を送ることができるようになりました。しかし、この堰のため、長生から桑野までは、大雨の度に田畠から屋敷まで水の底になることが度々になり、年に5回も6回も洪水になった年もあったと記されています。

### アクセス 一の堰

- JR阿南駅より西北西へ直線距離で約1.2km
- 阿南市富岡町
- 緯度経度 北緯33度55分18秒、東経134度39分00秒





平成一〇年（一九九八）の高知水害では、時間雨量が百ミリを超えるような豪雨が降りました。

老夫婦は二人暮らしでした。妻は五年半前、脳梗塞<sup>のうこうそく</sup>で倒れてからは体が不自由で、人に支えてもらつて立つののがやつとでした。そこに突然の豪雨により、片地川の堤防が決壊し、濁流が一帯の民家に流れ込みました。一階のベッドで寝ていた夫が浸水に気付いたのは午前二時頃でした。ベッドから下りてみると水がすねの辺りをぬらしていました。

「これはいかん」隣で寝ていた妻を立ち上がらせました。二人は二階を目指しました。その間も水は容赦なく押し寄せ、夫の首まで達しました。もう、前に進むことはできませんでした。

妻の頭が水につからないように夫は抱えました。「冷やい、冷やい」と繰り返す妻の足を、浮いた畳の上へ上げてやりたいと思いましたが、頭を支えるだけで精いっぱいでした。

「もう限界じゃきね」「お別れぞね」妻は夫の腕の中で息を引き取りました。夫は妻の体の重みをその手で受け止めました。それからどのくらいの時間がたつたことでしょう。空が明るくなつた午前六時半過ぎ、夫は救助されました。



▲平成10年の浸水状況（土佐山田町神母ノ木）  
（'98高知水害の記録 豪雨パニックより引用）

## 背景

平成10年（1998）9月23日秋雨前線により降り出した雨は、四国地方の各地に1,000mmにも達する雨量をもたらしました。高知市では24日6時からの日雨量が943mmにも達し、市内各地で家屋の浸水が発生しました。この時、香美市土佐山田町では片地川の堤防が決壊し、近くに住む体の不自由な高齢女性が溺死するという痛ましい出来事が起こりました。

## アクセス 山田堰跡（物部川）

- JR土佐山田駅より東北東へ直線距離約3km
- 香美市土佐山田町
- 緯度経度 北緯33度36分44秒、東経133度42分48秒





## 障害者に対し安全・安心な避難対処法を考えること

## 避難なんてできやせん (高知県高知市)



平成10年9月25日の浸水状況▲▶



### 背景

高知はかつて「河内」<sup>こうち</sup>と標記されていたそうです。昔から度々水害に見舞われ、人々は水害との闘いを続けてきました。平成10年（1998）9月の秋雨前線により、高知市では24日6時からの日雨量が943mmに達し、市内各所で家屋が浸水しました。高知は激しい雨と河川の越流で「河内」になってしまいました。この話は、平成10年高知水害を体験した障害者の方の体験談をもとにしたものです。

### アクセス 高知平野を一望できる五台山

- JR高知駅より南東へ直線距離約4km
- 高知市吸江
- 緯度経度 北緯33度32分53秒、東経133度34分23秒



傘を突き抜けると思うほど猛烈な雨、時間雨量一二九・五ミリが降った平成10年（1998）高知水害。この話は、平成10年（1998）の高知水害を体験した障害者の方の体験談をもとにしたものです。「裏山からは石がゴロゴロ崩れ始め、もう私たちは覚悟を決めました」と話すのは高知に住むAさんです。Aさんの夫は約一〇年前、脳卒中で倒れ、自宅で寝たきりの生活でした。水害時、地域には避難勧告が出され、近所の人も何度も「早く避難して下さい」といつて戸を叩きに来たと言います。しかし、「こんな豪雨の中、避難なんてできやせん」と言つて断りました。「裏山が崩れ、この家が押し潰されたら一人でここで死のう」と覚悟を決めたそうです。

在宅寝たきり障害者の方の中には、避難勧告が出された時、地域の人の介助で避難所までたどり着くことができた人もいます。しかし、トイレのこと、自分で姿勢を保つことなどが自由にできないBさんは、避難所に居ることもできず、幸いに市役所の仲介で病院に入院することができようやく落ち着いたといいます。一方、すみやかに特別養護老人ホームへ臨時入所させてもらいホツとしたじさんもいました。



昭和五一年（一九七六）、高知市を台風一七号が襲った高知水害のことです。

住んでいる地区が海拔ゼロメートル地帯であるため、私は、台風に備えて家具を二階に上げるかどうか判断しようと、夕刻、玄関先に出ました。深さが二メートル近くある側溝の水位が、見る間に玄関まで上がつてきました。慌てて家具や電化製品を二階に上げ、畳を外し終わつたところで、床板が浮き始めました。

二階にいれば大丈夫と、落ち着きを取り戻していた矢先、テレビから高知市長の「非常事態宣言」が流れ、「鏡川の堤防が決壊したので、二階も危ないから各自逃げよ」と報じられました。「非常事態宣言」には見捨てられた思いが強く、かなりショックでした。反面、生き抜くためには自力で自分を守るしかないと悟つた瞬間でもありました。すでに玄関前の水位は腰のあたりまできていました。

暗闇の中、腰まで水に浸かりながら、避難場所へと向かいました。道は濁水で見えず、日々の記憶を頼りに、勘で進むしかありませんでした。また、周辺の深い側溝には各家の出入り口にコンクリートの蓋ふたがされているだけだったので、落ちたら最後という恐怖感つのが募り、一步ずつ、つま先で確認しながらの避難でした。避難場所まで時間にして二〇～三〇分ぐらいの時間でしたが、ものすごく長く感じました。



## 背景

昭和51年（1976）9月、台風17号の停滞とその後6日間降り続いた雨により、高知市では降り始めからの総降雨量が1,306mmという記録的な豪雨となりました。市内を流れる鏡川、神田川、久万川などの川が氾濫し、市内のほとんどが水没しました。このため、高知市長は「非常事態宣言」を発表し、「自分の命は自分で守ってほしい」という報道がなされました。災害時には行政が対応できない事態が想定されます。その時には、自分の身は自分で守ることの重要性を伝えています。

## アクセス

### 非常事態が宣言された高知市(高知城)

- JR高知駅より南西へ直線距離約1.5km
- 高知市丸ノ内
- 緯度経度 北緯33度33分39秒、東経133度31分53秒



## 「寸志夫」の協働の精神に学ぶこと



### 背景

高知県の波介川に関する史料によると、川底を「寸志夫」で掘るという記録が残されています。寸志夫とは、自発的に無償で仕事をすることです。今日で言うところの「ボランティア」です。藩政期の波介川では、川の水はけを良くするために、村人たちが自発的に川底を掘る作業を行っていました。その村人の熱意は藩を動かして、波介川の改修につながりました。

### アクセス 波介川水門 (波介川)

- ・波介川は仁淀川大橋より南へ直線距離約500m
- ・土佐市用石
- ・緯度経度 北緯33度29分23秒、東経133度27分10秒



文政二年（一八二八）、土佐市周辺は大洪水に見舞われました。村の人々は庄屋を中心に話し合い、波介川の水はけを良くして、洪水による被害を少なくするために、川底を掘る作業をすることになりました。からの命令ではなく、村人が自分たちの意志で自発的に作業に参加したので、「寸志夫」と呼ばれています。この時に村人が川底を掘ったのは、初田と出間の二ヶ所でした。これは、波介川の全長から言うと、ごく部分的なものでした。しかし、これ以降、村人は村を水から守るためにには藩に頼るだけではなく、自分たちも応分の協力をしようというようになりました。

「寸志夫」を実行するためには見事な組織が作られていました。村々に差配役が組頭級から選ばれて、銀、米、その他の調達をしました。責任者の庄屋は現地に詰めました。また、監督に来る郷廻の役人の接待から祈禱のための神官や僧侶の接待、さらに角力場の設置、角力取りの宿割りからはじまつて警備まで行き届いていました。経費については、地主、富裕層が負担していました。

封建社会の中で人々は忍苦を強いられながらも自覚を高めていたのです。このような村人の熱意が藩に届かないはずはありません。その後、藩による波介川の改修工事につながることになりました。



▲昭和10年洪水の浸水状況  
(四万十市百笑)



昭和10年洪水の浸水状況▶  
(四万十市中村)

## 背景

昭和10年（1935）8月27日、台風による降雨が強まり、渡川（四万十川）と後川が甚だしく増水しました。眞同では28日午前7時に3.70mの水位が、翌29日には最高12.07mに達しました。27日の夕方、後川堤防が破堤し中村のまちは全町水に没し、大海のようになりました。また、破堤したのが夕方で満水が夜中であり、死にものぐるいの阿鼻叫喚の中での避難にもかかわらず、一人の死者も出なかったことは全くの驚異であると伝えられています。

## アクセス 一条神社

- ・土佐くろしお鉄道中村駅より北西へ直線距離約1.5km
- ・四万十市中村本町
- ・緯度経度 北緯32度59分27秒、東経132度55分03秒



「いよいよ大時化となつたぞ」渡川と後川の増水がはなはだしいので、老人たちが「明治二三年（一八九〇）ほどの洪水になるぞ」と言いだした。水位はますます高くなる。拙宅（安並にあつた自宅）の下の民家の荷上げの手伝い、豪雨の中の作業はみんな懸命であった。人は皆高い家に避難した。夕方になつてその家が流れるというので、屋根へ上がって綱で近くの大木に繋ぐ。西久保の民家の二階がつかり、やがてその家も全部流れてしまった。このとき初めて家の流れるさまを見た。屋根の丸瓦が沈むまでは流れないが、屋根の瓦が見えなくなると浮いて流れる、無惨な光景であった。（中略）

それまでに二七日の夕方、急に後川右岸が破堤して、中村町（現在の四万十市中村付近）に洪水が流れる椿事が起つた。町の警察、消防団、幡多支庁、町役場は驚いて、警察は半鐘をならして緊急避難を伝えた。驚いた町民は夕方の雨中、奔流の中を古城山、一条神社、天神さま、土生山へ我先と避難。（中略）町の人達も明日は大水で堤防が切れるという警報に、死にものぐるいであつたという。その晩公園山（古城山）その他では、野宿、町内全域停電で、真暗闇の中を懐中電灯をたよりに各自助け合いつつ避難した。夜中の懐中電灯の光とぎわめきと叫びは夜の明けるまで公園山に続いた。阿鼻叫喚とはこのことか、後川を隔てた私の家には台風の中とぎれとぎれに聞こえた。今でも私の耳の中には、その声が聞こえてくるようである。

「全没した中村の町は、阿鼻叫喚のちまたと化した」と昭和二年（一九三六）幡多郡東山村（現在の四万十市安並付近）の助役は語っています。

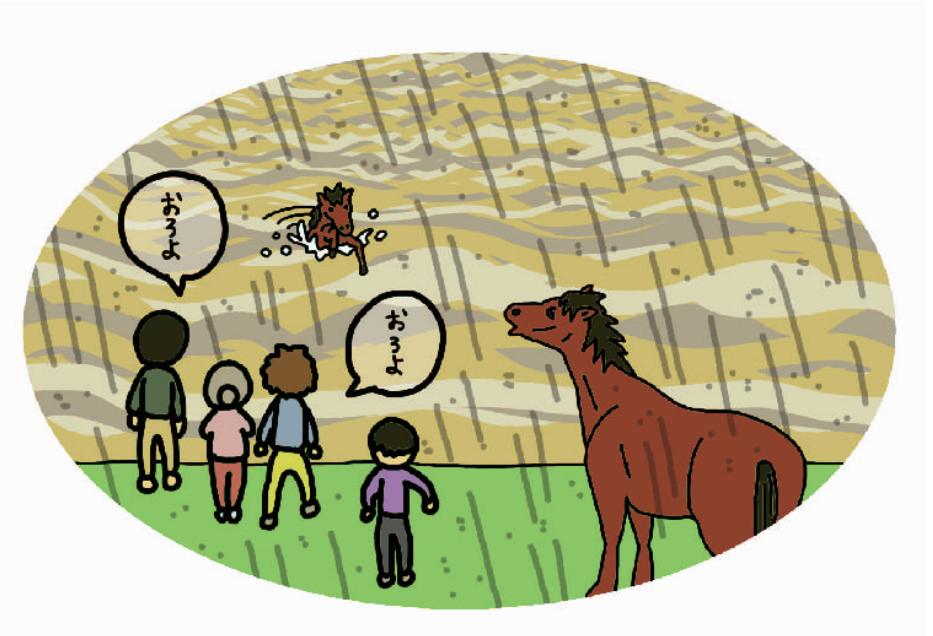


今から一〇〇年以上前の明治二三年（一八九〇）、四万十川沿いでの出来事です。大暴風雨によって四万十川が大洪水になる恐れが出てきたため、屋敷の低い家屋は高台に家財道具や牛馬を避難させて、万一の大洪水に備えました。我が家では二階に上げていた米俵を、屋根を抜いて上の畠地に引き上げました。

米俵をあげてホツとするとき、つないでいた子馬が道からすべって、川に転落してしまいました。これを見た女たちは声を揃えて、「おろよ、おろよ」（おろとは馬のこと）と必死の声を振り絞つて呼びましたが、子馬は泳いで家に帰ろうとして、そのうち流れに流され出しました。

水泳達者な祖父も泳いで助けに行くことができず、人々は「おろよ、おろよ」と呼ぶほかはありませんでした。幸いにも子馬は親馬のいななきによつて、頭の向きを変えて泳いで帰つてきました。

動物とは言え、あの大洪水に親馬のいななきによつて、流されずに親の元に帰つてきた親子の絆は、この時の人々の感情に刻み込まれました。子馬が上がつてくると、親馬は長い舌でなめまわし、子馬は救われたと喜んでいます。大暴風雨、大洪水の中での感動的な出来事でした。



## 背景

明治23年(1890)は初夏から天気が順調で、作物は近年にない豊作でした。ところが、9月9日午後から降り始めた雨は10日にはやや激しくなり、さらに11日には豪雨となり、四万十川と後川の水量は増加しました。このため、中村のまちは、低地はもちろん、上町や本町辺りでも瞬く間に浸水しました。この洪水は昭和4年(1929)に着工される渡川(現在の四万十川)改修工事の計画の規模を決める洪水となりました。この話は、母馬のいななきによって子馬が救われた親馬子馬の話です。

## アクセス 後川

- ・土佐くろしお鉄道中村駅より北北西へ直線距離約2km
- ・四万十市安並
- ・緯度経度 北緯33度00分00秒、東経132度56分07秒



今から三〇〇年以上も前のことです。中筋川沿いの国見村（現在の四万十市国見付近）は元禄一三年（一七〇〇）、一四年（一七〇一）、一五年（一七〇二）と連続の大洪水で、村人は山を売り、田を売り、屋敷を売つて、草の根まで食べて命をつないでいる状態でした。明けて宝永元年（一七〇四）、今年こそはと思っていると、七月に三度の洪水に遭い、絶望のどん底におちいりました。しかし、こんな年でも役人による検見は受けなければなりません。

宗兵衛は老役の弥助と相談して、検見役に凶作地ばかりを見せて、年貢を少しでも少なくしてもらうことを計画しました。検見役が来た時、二人は「国見の七まさり」という道の谷にある劣等地を見せたり、上作地の「森の松」と劣等地の「沖の松」を取り替えて、減免を願つたりしました。それは村人のための苦肉の策で、誰一人として密告する者はいないと思われましたが、その時、東の丘の上から「宗兵衛、弥助は森の松と称して検見方をだます者」と叫ぶ者がいました。役人は感づいて二人に詰問しました。

二人は、永年の凶作に村の困窮は極限に達していると述べ、特別のご慈悲を願いましたが、聞き入れられず、役人は二人を捕らえようとしました。弥助は逃げることができましたが、宗兵衛は捕らえられ、高知に護送され、宝永二年（一七〇五）二月一二日斬罪ざんざいに処せられました。

しかし、宗兵衛の死は、検見方を反省させることになりました。宗兵衛の訴えが聞き入れられ、国見の土地は捨地として明治九年（一八七六）の地租改正まで減免され、村人の生活に偉大な功績を残しました。村人は宗兵衛の徳を慕い、社殿を建ててその靈を祀りました。これが若宮神社（現在は天満宮に合祀）です。



▲中筋川と国見地区を望む

## 背景

義民とは、一身を犠牲にして世のため人のために尽くした人のことです。中筋川流域では、昔から水害が多発して、農民は困窮こんきゅうしていました。国見村の庄屋だった中平宗兵衛は村人にに対して耕作に精を出すよう励ますとともに、藩に対しても田畠が浸水した時には捨地として年貢を納めなくてもいいように働きかけていました。三年連続の大洪水で村人が困窮している年に、またもや洪水が起きました。この年の検見（役人が来てその年の作柄から税金を決める）に際して、宗兵衛は村人のためを思い、検見役に凶作地ばかりを見せて、年貢を少しでも減免してもらうように計りました。

## アクセス 天満宮

- 土佐くろしお鉄道国見駅より西へ直線距離約1km
- 四万十市国見
- 緯度経度 北緯32度58分49秒、東経132度52分48秒



## 声かけて犠牲者ゼロにできること

救ったのは人のつながり（高知県土佐清水市）

平成一三年（二〇〇一）の高知西南部豪雨を体験した土佐清水市下川口浦の区長の体験談です。

私は下町に住む友人から浸水の知らせを受け、すぐに区長場に入り、マイク放送で下町と中町に避難命令を出しました。それは、九月六日午前四時過ぎだつたと思います。

各戸に避難を大声で呼びかけながら、河口にある水門を閉めるため消防団員三名と向かいました。水門に

たどり着きましたが、水門を閉めるのを諦めました。集落内の各溝を通じて大量の水が川に流れ出していたからです。地区内住民の安全確保のため、消防団員と連携しながら、全戸を歩いて避難を呼びかけました。

その時、下町と中町では床下浸水、床上浸水までの家も多くあり、住民は次々と避難所に集まつて来ました。消防団員は二、三人でチームを組んで住民の安否確認のために巡回していました。独居老人宅を訪ね、一人、二人と救助しました。懐中電灯を手に、しのつく雨と稲光りの中での声かけでした。

明け方になつて下川口橋に流木や家具、布団、畳等がかかり、川の流れを完全にせき止める形となり、その水が集落内に流れこんできました。下・中・上の各町筋が川となり、見る見る内に民家の一階部分まで水没し、堤防は決壊し、船だまりの小舟は流され、車は目の前を何台もが浮かんでは消えていきました。

住民の安否の確認のため、明るくなつた地区内を首まで水につかりながら、全戸に声かけをしました。道路の中央部分を歩き、流れて来た二、四メートルもの竹を手にして、玄関や窓などをノックして回りました。



▲老人を背負って避難

## 背景

この話は、犠牲者ゼロ水害の住民行動の様子を体験談に基づいて描いたものです。平成13年（2001）9月5日夜から秋雨前線が停滞し、翌6日未明にかけて高知県西南部では集中豪雨が発生しました。降水量は、大月町で総雨量577mm、24時間雨量520mm、時間最大雨量110mmを観測するなど、記録的な大雨となりました。この水害は「寝耳に水」の危険な災害にもかかわらず、死者・行方不明の出なかつた特徴的な水害でした。土佐清水市下川口浦の区長の行動から、一人の犠牲者も出すことがなかつた要因をうかがい知ることができます。

## アクセス 平成13年水害の碑（宗呂川）

- ・土佐清水市役所より西へ直線距離約12km
- ・土佐清水市下川口橋南詰め
- ・緯度経度 北緯32度47分00秒、東経132度50分28秒





## 駐在さん、駐在さん（高知県土佐清水市）

まず要援護者の避難に力を尽くすこと

平成一三年（二〇〇二）の高知西南部豪雨を体験した駐在さんの話です。私はパトカーを高くなつた所に移動させ、すぐに駐在に戻りました。すると、外線電話が鳴り出しました。

私はすぐに駐在の向かい側に住む八四歳のあのおばあちゃんのことだと思いました。このおばあちゃんは心臓を患つた独居老人で、いつも私に声をかけてくれるきさくな人です。この時、既に駐在所内の水深は一メートル位になつており、私は腰まで水に浸かりながら外に出て、おばあちゃんの方を見ました。するとおばあちゃんは自力で家から出てきたのか、家の前にある良心市（無人販売所）の棚につかまり、私の方を向いて必死に助けを求めて叫んでいました。

おばあちゃんの声は、雨と雷と付近の人の叫び声に遮られ、私の耳に届くことはありませんでしたが、「駐在さん、駐在さん」と言つてゐるよう思ひました。私はその姿を見た瞬間、無我夢中でおばあちゃんに向かつて走り出していました。走り出すと言つても、駐在前の道路は既に私の胸の高さにまで水が増えていますので、少しずつしか前に進めませんでした。

何とかおばあちゃんの元に辿り着き、おばあちゃんを右脇に抱え、胸の高さにまで増水して濁流のようになつた道を泳ぐようにして駐在へ向けて進みました。既に道路に足のつかないおばあちゃんは、私の負担をどうにかして軽くしようと、八四歳の体力を振り絞つて足を動かし、言葉にならない声で私に何か言つていました。その声は聞き取れませんでしたが、おばあちゃんの目を見れば、何を言わんとしているか分かりました。必死の思いでおばあちゃんを駐在の近くの支所に避難させ、急いで駐在に戻りました。



### 背景

平成13年（2001）9月5日夜から秋雨前線が停滞し、翌6日未明にかけて高知県西南部では集中豪雨が発生しました。土佐清水市の宗呂川の水位は急激に上昇し、川沿いの県道もまるで川のような状態になりました。この話は、川のようになった県道の向こう側にいるおばあちゃんを救出した駐在さんの話です。駐在さんとおばあちゃんの無言の会話に、お互いを思いやる気持ちが表現されています。

### アクセス 下川口駐在所前

- ・土佐清水市役所より西へ直線距離約12km
- ・土佐清水市下川口
- ・緯度経度 北緯32度47分05秒、東経132度50分28秒





## 重要度の高い地域を守る工夫・知恵に学ぶこと



### 背景

宿毛のまちを守るために、野中兼山は万治元年（1658）に松田川右岸に「総曲輪」と呼ばれる堤防を築きました。それと同時に、松田川左岸側の堤防を低くし、いざという時には左岸側に水が流れるようにして、宿毛のまちを守っていました。封建時代には左右岸の堤防の高さに違いを設けることにより、重要度の高い地域を守るために対策がとられていたのです。

### アクセス 河戸堰（松田川）

- ・土佐くろしお鉄道宿毛駅より北東へ直線距離約2km
- ・宿毛市中央
- ・緯度経度 北緯32度56分23秒、東経132度43分51秒



この話は、高知県で「土木神の化身」と呼ばれるほど堤防や堰、新田開発、港湾などの土木工事を行つた野中兼山が宿毛のまちを洪水から守る堤防（総曲輪）を様々な工夫をして築いた話です。

総曲輪は、河戸堰から下流の松田川右岸を取り巻く堤防で、延長二、八〇〇メートル、幅員六、一〇メートル、高さ四、六メートルの大規模なものです。野中兼山の命により、幡多郡七万石の全地域から人夫を集め、宿毛の侍たちがその監督に当たつて工事を行つたものです。

それまで宿毛を流れていた支流をせき止め、川幅を広げて一本の川にまとめるための工事は並大抵の苦労ではなかつたに違ひありません。伝承によると、兼山はどんなに寒い日でも仕事を休まず、「荒瀬の川が凍つたら休ませてやる」と言い、人夫たちは「雪や降れ降れ、あられも降れ降れ、荒瀬の川が凍るまで」という絶望的な詩を口ずさみながら工事を続けたと伝えられています。

兼山は、宿毛側の護岸に水勢をはねかえす「はね」を設け、水勢を対岸の和田や坂ノ下に向けるように工夫をしていました。また、宿毛対岸の古川口に水越堤防を設け、和田・坂ノ下の堤防を、宿毛より一、三メートル低くして、洪水が氾濫した時は、先にこの堤防を越えさせ、和田、坂ノ下を水没させて水位を下げ、宿毛の安全をはかるようにしていました。このため、この工事以後、和田、坂ノ下両村の水害が絶えることがありました。

藩政時代には領主の居る宿毛に抗議することは許されませんでした。和田の人々は高い台地に家を建てて、住家を水害から免れるように工夫していましたが、水田は年々被害を受けていました。このため、和田の人々の中に兼山の悪口を言う人がいるとも言われています。



▲水よけ場（須賀神社）



▲壁に腰板をはった民家(大洲市若宮)

## 背景

この話は、あらがうことのできない肱川の洪水と共生するために生まれた水防の知恵に関するものです。肱川流域は手のひらのような形をしており、肱川が貫流する大洲盆地に多くの支流が流れ込んでいます。このため、大洲盆地には川の水が集中し、雨期にはいると毎年のように肱川が氾濫し、水害に見舞われてきました。この大洲盆地の集落では、定期のように襲って来る洪水への備えとして、家の床を地盤より高くし、壁には腰板をはつたり、一階を板間だけにしたりする水防建築などの知恵を生みだしました。

## アクセス 須賀神社

- JR伊予大洲駅より北北東へ直線距離約100m
- 大洲市若宮
- 緯度経度 北緯33度31分13秒、東経132度32分45秒

愛媛県大洲市の大洲盆地は、昔から水害の常襲地帯として有名でした。盆地内の集落は、洪水の被害をさけることを最も優先した場所が選ばれてきました。昭和四〇年ころまでの航空写真では、盆地の低地には集落はほとんど見られず、大部分が山すそに沿った比較的高い場所に帶状にならんで立地しています。大洲盆地の低地に開けた若宮の集落は、肱川の自然堤防上の微高地に立地していたため、洪水のたびに、多くの家が浸水する被害を受けてきました。

肱川沿川の集落では、地域を洪水から守ろうとする土手（小規模な堤防）を築きましたが、闘う相手が余りにも大きかつたため、全村が水没するという水害からは解放されませんでした。そのため、ここに住む人々は、家の石垣を出来るだけ高く積み立てるようにして浸水に備える生活を続けてきました。中でも若宮では洪水への備えが特に嚴重で、全ての家が二階建てでした。また床を地面より七〇から八〇センチメートルも高くし、壁には腰板を張つて保護し、一階は板張りの間として重要な家具は二階に置いた家が多くありました。また、大洪水に備えて、若宮の上組・中組・下組の地域ごとに二箇所ずつ神社や寺院、庄屋などの屋敷全体を高くして高石垣を築き、水をよける場所としていました。さらに避難用の船なども用意していました。

こうした高石垣の屋敷は地域が浸水した時の避難地の役割を担っていたのです。地域の中で最も高い造りとなっています。現在でもそのような「水防場」が多く残つており、大洲市若宮町にある須賀神社などがそうです。まさしく、水害に備えた究極の危機管理対策そのものであり、暮らしを守るために生まれた「暮らしの知恵」です。



## 昔の洪水の記録から、地域の災害特性を知ること

江戸



### 背景

肱川には、大洲藩主の加藤家が元禄元年（1688）から万延元年（1860）の172年間にわたって、水番2人を置いて交代で昼夜水位を観測させた記録が残っています。この中で最大の水位を、文政9年（1826）5月21日の大洪水で記録しており、三丈三尺一寸（約10m）に達しました。この話は、この時の洪水の様子を描いたものです。

水位観測はその後、愛媛県や国に引き継がれ肱川には300年を超える水位の記録が残されています。

### アクセス 大洲城

- JR伊予大洲駅より南南西へ直線距離約1km
- 大洲市大洲903
- 緯度経度 北緯33度30分34秒、東経132度32分39秒



大洲藩の記録で肱川の水位が大洲で最大を示した文政九年（一八二六）の大洪水のことです。この年五月二〇日より雨がしきりに降り出し、翌二一日にはさらに大雨となり、あたかも車軸を流すようになりました。夕暮より川の水がにわかに増加し、堤が二ヶ所崩れ、水が溢れて三里に一里の広野が海のようになります。前代未聞の洪水です。大洲城の東にある燕門という見上げるほどの大きな門に洪水が渦巻いて、とびらが二枚とも流れてしまいました。土地が低い所では、水に浸かつた高堀の上を自由に舟が乗り越えるほどでした。

中町の川寄屋という酒屋は昔の丑寅の洪水のことを考えて石垣を高くしましたが、今度も水浸しになり、家財をすべて濡らしてしまいました。長門屋という酒屋では蔵の酒桶が傾き、下人が残らずこれにかかり切れになり、畠はもとより衣類、道具、そのほか多くを水に浸し、脇差七〇腰が壊されました。大事な時なので、翌日から役所に出勤しなければいけないのに、脇差がないので徳の森屋という所で借りることになったそうです。塩屋町の松屋という紺屋（染め物をする家）の打盤（衣類を棒でたたいて柔らかくする木製の台）は、長門屋の茶の間に流れ込んでいたので、後で四人がかりで引き取りにきました。奈良屋という門屋（女子などが住む小屋）は居宅も蔵も壁が崩れて破れ、あらゆるもののが流れ、客も家の者もようやく逃げて、命が助かる有様でした。

こういう状況ですので、みな二階または屋根の上にいて、のどが渴いても呑み水もなく、男子は窓から小便をし、汚いこと極まりない状態です。家ごとに壁が崩れ落ち、囲いもまばらなり、油も切れ、灯心もなくなり、盗賊が徘徊する始末です。犬は水が増すにしたがい、屋根の上に登り、水が引いた後、下ろしてやる人がいないため、屋根の上をはい回り吠えていました。



▲平成16年の洪水による浸水状況（大洲市東大洲）



▲平成16年の洪水による浸水状況（大洲市西大洲）

## 背景

平成16年（2004）8月の台風16号は、大洲市に1日の雨量の記録更新となる179mmの大雨をもたらしました。肱川の水位が上昇し、肱川橋では危険水位（現在は、はん濫危険水位と呼ぶ）5.80mを超える6.85mを記録しました。このため、大洲市では床上浸水73棟、床下浸水91棟という被害が発生し、住民約200人が避難しました。この話は、当時大洲市で住民に避難勧告に関する情報を伝える役割を担っていたながら、思うように伝達することができなかつた人の体験談です。

## アクセス

### 無線設備が浸水した付近（逆なげ橋（肱川））

- JR伊予大洲駅より南東へ直線距離約3km
- 大洲市菅田
- 緯度経度 北緯33度30分22秒、東経132度35分34秒



平成16年（2004）の台風16号による水害発生当時、私は防災行政無線により水位状況や避難勧告に関する情報を伝達していました。その日は朝方から強い雨が降り始めました。夕方になると雨は一段と強くなり、肱川の水位は急激に上昇はじめ、警戒けいかいをする水位には一七時ごろ達しました。その後も水位は想定以上の速さで上昇し、二〇時頃には、さらに一メートル四〇センチも上昇し、河川による氾濫の危険がある水位に達していました。

二〇時五〇分に市全域に自主避難勧告を発令することになりました。しかし、その時にはすでに予想を超える高さまで水位が上昇しており、上流の三地区で放送の前に無線設備が浸水してしまい、その地区に避難勧告の情報を周知、伝達することができなかつたことが、後で分かりました。

深夜一時に肱川の水位は最高となり、六メートル八五センチに達しました。警報施設は、平成七年（一九九五）の浸水実績を考慮して高さを決めていましたが、平成16年の洪水はさらに一メートルも高く、戦後二番目の水位を記録しました。

今回一番考えさせられたのは、どうすれば災害に関する情報を早く正確に市民に周知、伝達できるかです。情報通信技術に依存する手段も考えられますか、やはり最終的に大切なのは、地区住民同士の互助の精神ではないでしょうか。区長や水防団の方々を中心に独居老人、障害者、子どもなど、どのような人がどのような場所に住んでいるかを把握はあくし、情報伝達に関するネットワークづくりをしていくことが一番大切であると感じています。



## 日頃からいざという時のために備えること

## 避難用の舟（愛媛県大洲市）

今は堤防ができていますけど、昔は地盤も低いし、護岸<sup>ごがん</sup>を痛めんように、竹藪<sup>たけやぶ</sup>を生やしておつたんですよ。堤防がなかつたから、川の水位が上がると、氾濫してこっちの土地の水位も川と高さが変わらんようになります。

昭和一八年（一九四三）の時には家の二階まで水がつきました。本家が直線距離で一〇〇メートルほどの山手にあつて、親父が舟に乗せてくれたのを覚えています。でも、うちも二階建ての家だつたから、下が浸かつても上で居れる状態だつたんで、そう何度も本家に避難することはありませんでした。

しかし、昭和二〇年の時には、本家に避難することになりました。親父は兵隊に行っておりませんでした。今の堤防がある所に家があつて、その裏の物置に水がついたら舟が浮くようになつていたんで、私が舟を出したんですが、子供だつたからようあやつらなんだですよ。

堤防ができる前までは、年中行事みたいに浸かつっていました。昭和一八年、二〇年だけじゃなくて、時々舟を出すことはあつたですよ。

同じ五郎でも下が低いので、下から順々に水が来るんですよ。「来たな」という感じですよ。下と比べると、ここが浸かるまでは若干時間的には余裕があるんです。そのうち下からだけでなく、上流からも水が来て家の前辺りで合流し出して、やがて川と一緒にみたいになるんですよ。その時代には父が「五郎では住めんようになりそうだの。高い所の人はええわな」と言つていました。



避難用の舟▶

## 背景

肱川は、愛媛県の北西部に位置し、その源流を愛媛県西予市の鳥坂峠（標高460m）に発し、宇和盆地、野村盆地、大洲盆地を貫流し、伊予灘に注ぐ愛媛県一の大河川です。肱川は、その名が示すように中流部で‘ひじ’のように大きく曲がっており、河川の延長は103kmあるのに対して、源流から河口までの直線距離は、わずか18kmしかありません。肱川は、大洲盆地に入ると勾配<sup>こうばい</sup>がゆるくなるため流れが弱くなり、洪水氾濫<sup>ひんぱつ</sup>が昔から頻発していました。

## アクセス 五郎地区堤防（肱川）

- JR伊予大洲駅より北東へ直線距離約1km
- 大洲市五郎
- 緯度経度 北緯33度31分36秒、東経132度33分10秒





## 大谷川の水除け争い (愛媛県伊予市)

江戸時代の中ごろ、明和元年（一七六四）の夏、村の農民は台風のことが心配になり始めました。精魂こめて育てた稲も、台風が来て洪水になれば台無しです。下三谷村のある者が言いました。「下の南黒田村の連中が堤防をこさえたそうだ。洪水になつたら、今度はわし等の田んぼが浸からんだろうか」この言葉を聞いた村人たちは急に心配になり始めました。ある晩の寄り合いで話は決まりました。八月一日の午後三時、下三谷村の村民七、八〇〇人が大谷川の南黒田村の堤防の両岸に立ち並び、大声をあげながら堤防を壊し始めました。南黒田村の村民はなすすべもなく、ただ見守るばかりでした。

もともと、大谷・八反地両河川が出会う堂ノ口あたりは水はけが悪い土地でした。しかも、南黒田が新谷藩領、下三谷村が大洲領に分けられ、大谷川の治水政策が統一的に実施され得なかつたところに禍根がありました。大洲領の上流の下三谷・北黒田村では嵩上げかさあが行われましたが、新谷領の下流の南黒田村では、なんの対策も講じられませんでした。そのため南黒田は洪水があれば河水が氾濫し、人家や田地は大きな被害を受けていました。その被害を防ぐため、南黒田の人々は自力で堤防の嵩上げを行つたのです。しかし、先に述べたように自分たちが汗水ながして嵩上げした堤防は壊されてしまつたため、下三谷村の理不尽さを藩でとりあげてもらうよう、南黒田の百姓一統が庄屋・組頭に嘆願した記録が残っています。

その後、大洲藩は自領である砥部庄大南村と、新谷藩であつた南黒田村との替地を幕府に願つて、天明元年（一七八二）許され、翌二年南黒田村は大洲領となりました。こうして、天明四年頃には、大谷川流域の築堤も完成し、水論の禍根は絶たれることになりました。



## 河川を統一的に管理することの重要性を知ること

### 背景

現在の伊予市立伊予中学校の前を流れる大谷川は、上流からの土砂の流出が多く、山地から低平地に出ると川の流れが弱まって土砂を堆積させるため、天井川となっています。このため、氾濫頻度は高く、大谷川の上流と下流の人々が水防をめぐって対立し、堤防を切り崩したり、堤防の嵩上げをしたりしていました。この地域は大洲・新谷両藩に分けられており、大谷川の治水行政が統一的に行われていなかったため、この対立は増幅されました。

### アクセス ウエルサンピア伊予公園前(大谷川)

- 伊予鉄郡中線新川駅より東へ直線距離 1 km
- 伊予市下三谷1761-1 (ウエルサンピア伊予)
- 緯度経度 北緯33度46分13秒、東経132度42分51秒



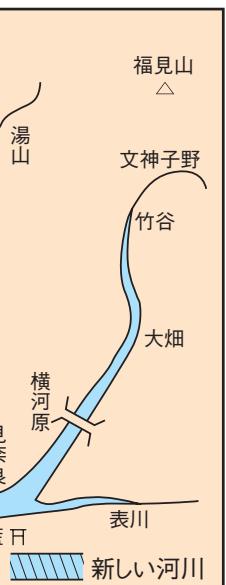


## 人名がついた重信川（愛媛県松山市）

四〇〇年も前の昔の話です。当時の松山道後平野は伊予の国を中心地でした。この松山平野は毎年のように水害が発生し、住民達はほとほと困り果てていました。そこに新しい殿様としてやってきたのが、加藤嘉明公です。殿様は住民達の苦労をみて、すぐに家来に川の改修を命じました。当時、重信川は伊予川と呼ばれていました。

川の改修を命じられたのは足立重信という重臣です。足立重信は川の改修のすぐれた技術を有していました。それでも伊予川は名うての暴れ川です。そのため改修工事は困難を極めました。中流から流路を北へ移すとともに、松山市の石手寺の近くにある岩堰と呼ばれる場所の固い岩盤を掘り割つて石手川の流れを変え工事は大変でした。何せ岩盤を人力とツチ（ハンマー）とノミで打ち碎いていますから一日かけても少ししか割れません。暑い日も寒い日もみんなで力を合わせて何とか岩盤を掘り終わつた時の喜びようと言つたら歓声が天に届くほどのものでした。このような努力を積み重ねて、川の改修工事は無事に終わりました。その後、何年かして、今まで降つたことがないような大雨に見舞われました。住民達は大洪水が起るものだと観念しました。しかし、一夜が明けて青空の下、堤は全然壊れていません。この光景を前にして住民達はみんな驚きの声を上げました。

これ以降、松山平野は大した洪水に襲われることもなくなつたので住民達は大いに感謝しました。そして、いつとはなしに伊予川を重信川と呼ぶようになりました。これは暴れ川を治めた足立重信に心より感謝したことです。人の名前がついた川は全国でも唯一です。そして今でも地元の人たちは足立重信の墓の掃除とお参りをかかしません。足立重信の功績は今でも人々の心に深く焼き付けられています。



▲重信川・石手川の付け替え（加筆）  
（「四国の先覚者とその偉業」から引用、加筆修正）

## 背景

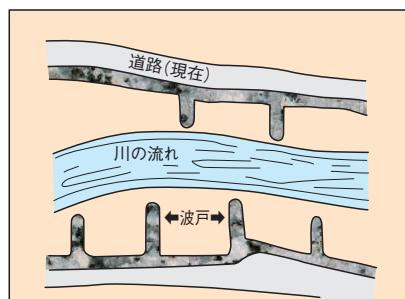
松山を流れる重信川は、愛媛県東温市東三方ヶ森（標高1,233m）を源流とし、延長36kmの河川です。司馬遼太郎は、「街道をゆく～南伊予・西土佐の道～」の中で重信川についてこう記しています。「日本の河川で人名がついているのは、この川だけですか。……領内の重要な河川に家臣の名をつけるなど、よっぽどのことであったろうと思われる」

重信川の流域には松山市をはじめ東温市、伊予郡が広がり、古くから社会・経済・文化の中心地であり、治水施設が整備される以前は甚大な土砂災害が発生していました。

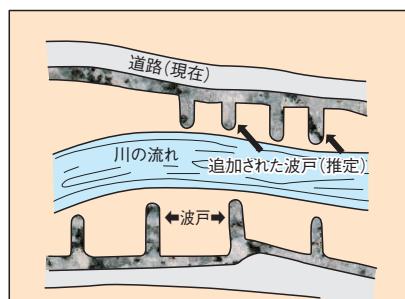
## アクセス 足立重信の墓所

- JR松山駅より北東へ直線距離約2km
- 松山市御幸1-525 来迎寺境内
- 緯度経度 北緯33度51分22秒、東経132度45分58秒





▲千鳥掛けの波戸 (推定)



▲文蔵によって改修された波戸



▲現在の石手川

## 背景

石手川は重信川の支川で延長は28kmあります。石手川は古くは城山の北側・城北地区を流れていたこともあります、足立重信による付け替え工事が実施された時には道後公園から松山東高校付近を流れ、城山の南側の二番町を経由して市役所付近を通り、そこからほぼ真っ直ぐ西へ流れて松山空港付近で伊予灘に注いでいたようです。付け替え工事後に旧河道は、埋め立てられ耕地となってしまいました。上流には、石手川ダムがあり、洪水調節と松山市民の水を担っています。

## アクセス 波戸

- 伊予鉄石手川駅すぐ
- 松山市立花 石手川公園内
- 緯度経度 北緯33度49分47秒、東経132度46分04秒



重信は、掘削をせずに両側に堤防を設け、浅く川幅の広い川にしました。しかし、石手川は急流で洪水時には水とともに大量の土砂が流れています。このため、土砂が川の中に堆積し度々川浚えが必要となり、また川の流れが堤防を削り、水害をもたらしていました。

石手川が付け替えられておおよそ百年後の享保二年（一七一七）、西条の浪人であつた大川文蔵が松山藩に召し抱えられました。最初は、石手川の川浚えの普請組ふしきぐみとして見習いの立場にあつたようです。

享保六年、七年に大洪水があり、手腕が認められて大川文蔵が改修をまかされました。文蔵は石手川筋を見渡し、川が深ければ水害を免れることができると考えました。そこで、享保八年から一四年にかけて従来からあつた千鳥掛けの波戸（堤防から川の中央に向かつて出した構造物。水制）を、両岸から一ヶ所に突き出す波戸に改修しました。この結果、文蔵が予想した通り流水は川の中央を流れ、堤防を痛めることなく次第に川が深くなつていきました。

以降文政八年（一八二五）の洪水被害まで百年間ほど大きな被害がなかつたようです。大川文蔵の川の特性を考慮した河川改修によつて、今日の石手川があると言われています。



## 治山治水が大事（香川県観音寺市）

平成一六年（二〇〇四）に観音寺市を襲った台風豪雨では、あつという間に川の水位が上がりました。今にも川の堤防を越えそうな勢いです。消防団は急いで土のうをつくりに出かけました。「恐ろしい、堤防が揺れている。こんな洪水は初めてだ」と一人が叫びました。確かに洪水の力で河川堤防が振動しています。そんな中で力を合わせて何とか土のうを積みあげました。

「土のうで洪水を防げそうだ。とりあえず、これで一安心だ」という安堵の声がする一方で、「流木が橋にひつかかりそうだ。大変だ」との叫び声が上りました。確かに洪水に混じって沢山の流木が流れています。山の斜面が壊れた際に土砂とともに倒れた樹木が土石流と一緒に流れてきているのです。あつという間に橋が流木で塞がれてしまいました。そして、次から次に流木が引っかかって自然のダムが出来上がりました。「危ないぞ。橋の両岸から水があふれるぞ」との声が上がつたと思うと、濁流が荒れ狂つたように流れ出しました。川の両岸を越えた濁流は一気に家に流れ込んで、すさまじい破壊力で家々を壊してしまいました。

「最近は山の手入れをしないから、洪水がひどいな」と消防団員の一人、「そうだな、保水力もないし、樹木の根の張りが悪いから山が壊れやすい。沢山の流木が洪水災害を引き起こすし、山の手入れが必要だな」ともう一人の声。今まで経験したことがないような凄まじい自然の猛威を目の当たりにして、治山治水の重要性を痛感させられました。



▲破壊された町道  
（「証言 あの日を忘れない」平成16年香川県土砂災害の記録より引用）

## 背景

平成16年（2004）9月の台風21号の影響により、28日夜から香川県内全域で雨が降り始め、翌29日夕方には気象台から県下全域に大雨・洪水警報が発表されました。台風が最も接近した19時前後には、観音寺市栗井で1時間に66mm、観音寺市大野原町で65mmの非常に激しい雨が降りました。この話は、当時消防団長として台風を体験した人の証言です。

## アクセス

災害現場付近（大西川にかかるJRの橋）

- JR箕浦駅より西南西に約800m
- 観音寺市豊浜町箕浦
- 緯度経度 北緯34度02分39秒、東経133度36分43秒





昭和五一年（一九七六）台風一七号が来たときの話です。

九月一一日の朝、雨の中、隣のおじさんが大声で「上流の公民館が流れてくるぞーっ！」とみんなに知らせに来ました。私とお姉さんは、何も持たず、犬二匹を連れて、急いで避難しました。お母さんはお金を持って後から逃げてきました。お父さんは消防へ行つてきました。私たちは黒島のおばちゃんの所へ避難をするのです。停電なので真っ暗な中を、雷は鳴るし雨は降るし、とっても怖かったのです。私とお姉さんはびつちやんこになりながら、犬を必死に抱いて逃げました。何かにつまずいて転んだ私にお姉さんが「何しよん、早よ立ち、早よつ」ときつといいました。お姉さんがあんなにきつく言つたことはあまりなかつたので、私はびっくりしてすぐ立ち上りました。

一二日朝、雨が小降りになつたので、私とお姉さんとお父さんとで家へ大事な荷物を取りに帰りました。すると家の中は、水と土が膝の少し上まで来ていました。

夜、ごはんを食べた後、ローソクの下で、大人の人たちは死ぬことばかり言つていました。「もう最期やから賑やかにいかんか」などと言つています。お姉さんは、「どうせ死ぬんやつたら」と言つてよそ行きの服を着て寝ました。私は死にたくないと思いました。お父さんはお酒をたくさん飲んで、「どうせ死ぬんやつたら、ぐつすり寝てなんにもわからずに死にたい、苦しみの中で死にたくない」と言つてました。そんな話が続いて、とうとう夜が明けました。

「うわっ、助かつた！」誰もが言いました。太陽が光り「ああ助かつたんやなあ」と思いました。家を流されたり、つぶされた人もいます。亡くなつた人もいます。とても恐ろしい三日間でした。



## 背景

昭和51年（1976）9月、台風17号は小豆島に年間降雨量に匹敵する1,400mmもの豪雨をもたらしました。香川県全域の被害は、死者50名、重軽傷者127名、家屋の全壊274戸、半壊317戸、床上浸水4,477戸、床下浸水15,224戸にのぼりました。この話は、小豆島の小豆島町の小学校5年生の女子が体験した3日間の台風記録です。子どもの視点で、台風の怖さと助かった時の感動が記されています。

## アクセス 小豆島町役場

- ・小豆島町役場内海庁舎
- ・小豆島町内海
- ・緯度経度 北緯34度28分42秒、東経134度18分54秒

## 災害時には他人を頼るのにも限界があること



### 背景

昭和62年（1987）10月17日午前零時頃、台風19号は高知県室戸市付近に上陸し、四国南東部を北東に進みました。この台風により、三木町はわずか2日足らずで年間雨量の半分近い471mmという記録的な豪雨に見舞われました。香川県は温暖な気候で、まさか三木町に災害はないと思っている人が多いため、一旦、水害が起きると、ひっきりなしに110番の電話が鳴り続けました。この災害を経験した警察官は、何でも警察に頼らざるを得ない状況に対して警鐘を鳴らしています。

### アクセス 災害現場付近（大宮橋（新川））

- 琴電長尾線池戸駅より北北東へ直線距離約700m
- 三木町池戸（主要地方道小糸前田東線）
- 緯度経度 北緯34度17分05秒、東経134度07分25秒

## まさか三木町に（香川県三木町）

昭和62年（1987）の台風一九号を経験した警察官の話です。

一〇月一六日一九時二〇分「暴風雨波浪洪水警報」の発表を受け、全署員を非常召集して、台風に備えました。次第に強まる風雨の中、被害の出ないことを願わずにいられませんでしたが、二十一時過ぎ以後は、ひっきりなしに住民からの窮状を訴える一一〇番がかかつてきました。さらに出動中の署員からの報告とあわせ、ただならぬ事態の発生を知りました。

「急に水が来てしまった。年寄りがいるんです。何とかして」

「川の堤防が切れかかっている。すぐ男の応援を」

「水が家まで入ってきた。外も水が一杯でどこも行けん。ボートを」

「橋が流れ、車ごと転落したんです」

「住宅住民が避難中ですが、一名見当たらない」

普段おとなしい新川が「毒に苦しむ大蛇」のようにのたうち回り、一夜にして三木町内に大きなつめあとを残したのです。

不幸中の幸いというべきか、三木町では、一名の犠牲者も出すことなく、悪夢のような一夜は明けました。

## 災害時には思わぬことが起きるので、油断しないこと

## 電信柱に救われる（香川県さぬき市）



平成一六年（二〇〇四）の大型の台風二三号は今までに経験したことがないような雨量をもたらしました。家の外を見れば前の畠からどんどん水が家の庭に流れ落ちてきています。「これは大変だ。倉庫に入れてある米俵が水に浸かる」という思いがとっさに脳裏を横切りました。この秋、収穫したばかりの米をまだ倉庫に貯蔵していました。まさか倉庫を水没しにするほどの大雨があるとは思いもしませんでしたので棚の上にはあげていません。

家の前の泥水の水位は膝の下あたりでしたので、まだ倉庫に行けると判断して、土砂降りの中を外に出ました。その時、小石をふくんだ大水が一気に流れてきて、足を取られて流されました。目の前に見えた電信柱に無我夢中でしがみつきました。

その時、「おーい、この棒をつかめ」と知人の声。差し出された棒につかまつてやつとの思いで家に戻りました。「ありがとうございます。危なかったよ。それにしても洪水は怖い」と心から感謝しました。その後、何とか倉庫にたどり着き、米俵を階段や棚などの上に載せたときには本当にホッとしました。水に浸かつたら一年間の汗の結晶が水泡に帰してしまうのです。

一晩中、雨は降り続き、家の外ではゴウゴウと音を立てて流れしていく、怖くて眠れませんでした。明るくなつてから、あたりを見渡して驚きました。家の裏を走っている道路は川のようになつていて、何トンもありそうな大きな岩がごろごろと転がっています。私を救ってくれた電信柱は流されて跡形もありません。電信柱がなかつたら今頃、洪水に流されていたであろうと思うと今更ながらゾッとしたことは言うまでもありません。



### 背景

平成16年（2004）10月の台風23号は香川県内に大きな被害をもたらしました。県全域で死者11名、負傷者28名、家屋の全壊48戸、半壊357戸、床上浸水4,431戸、床下浸水13,336戸に及びました。この話は、さぬき市大川町で米を棚上げするために倉庫に向かおうとした人が、突然襲ってきた大水に足元をとられた時の体験談です。必死で電柱にしがみつき、人の手助けを受けて、危うく難を逃れることができました。

### アクセス 災害現場付近（砂防堰堤（森行地区））

- ・大川ダムより東へ直線距離約2km
- ・さぬき市大川町森行地区
- ・緯度経度 北緯34度13分45秒、東経134度15分51秒